

なら、引き受けましょう。」
そばやの主人は、安心して、帰りました。

④ 先生は、さつそく紙を出して、れんしゅうしてみました。しかし、思うような字は、なかなか書けません。次の日も、その次の日もれんしゅうしました。

先生「かんたんに書けそうに思ったが、うまくかけないものだなあ。毎日続けることにしよう。」

⑤ そばやの主人は、たのみに行つてから、数日して、藤樹先生の家に行きました。



主人「先生、かんばんを書いてもらえたでしょうか。」

すると、先生は、こう言いました。
先生「そばやさん、もうしばらく

まってもらえませんか。」

主人「はい、わかりました。」

そばやの主人は、『先生は仕事でいそがしいから、書けないのだ。』
と思つて、帰りました。

⑥ それから、十日ほどして、そばやの主人は、また、先生の家に行き



ました。

主人「先生、かんばんは書いてもらえたでしょうか。」

先生は、にこにこしながら、出てきました。両手で、かんばんをかかえていました。

先生「おまたせしました。この字で気に入ってもらえるかな。」

主人「わあ、みごとな字ですね。」

さつそく、あしたから、使います。
ありがとうございます。」



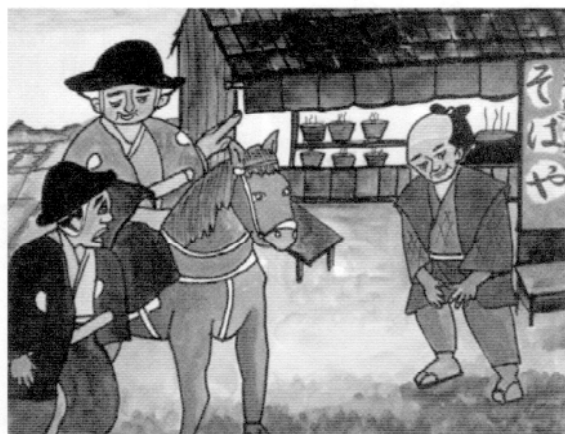
先生「お客さんが、たくさん来てくれるといいですね。」

そばやの主人は、喜んでかんばんを大切にかかえて、帰りました。

⑦ 次の日、そばやの主人は、朝早く起きて、すぐに、かんばんをかけた。店の前の大通りから、ながめてみました。みごとな字で書かれたかんばんのおかげで、店が引き立ちました。

主人「このかんばんがあると、『そばや』ということが、よくわかるし、また、上手な字だから、目立つぞ。」

知り合いのおじさんが言ったとおり、『そばや』の字が、よく目立つようになったので、店のお客さんがふえました。



⑧ ある日のことです。りっぱなみなりのおさむらいが、馬に乗つて大通りを通りかかりました。加賀のとのさまと、そのけらいです。

